

山鹿素行の教育内容論に関する考察

——構成と内容の分析を中心に——

内山 宗 昭

(序)

山鹿素行（一六二二—一六八五年）の教育論に関して、その教育内容論については、拙稿「山鹿素行の「聖学」における学習内容論の考察——陶冶の素材を中心に」¹⁾で主に検討を行ったが、素行の教育論全体との関係でみると、そこで取り上げた学習論は主に武士の個人の学習に関する記述を中心としているため、その内容が、素行の教育論全体の中でどのような位置にあるのか、具体的には、発達段階に関わって述べられた相当の教育内容論、あるいは学校論の相当部分等と如何なる位置関係にあるのか不明瞭な点があるため、この点をまず考察したい。素行の教育論で考えられた学習のあるいは教育・教化の素材についてみながら、その全体的な構成との関係を考察し、対象別の内容に関して確認したい。

そして、教育内容自体に関する考察として、陶冶の素材の意味、特にやや不明な内容の部分についての考察を行い、その特色につい

て、陶冶の素材の総覧的な把握に関わって補足的な検討を試みたい。素行の教育内容論の問題に関しては、拙稿「山鹿素行の教育論の思想構成上の特質に関する考察——学習論・家庭教育論・学校論の位置を中心に」²⁾でも、その概要を取り上げた。そして「山鹿素行の学習観——「聖学」の方法論を中心に」³⁾で方法との関係、その領域、著作上の位置についての考察を中心に、その教育・学習方法論との密接な関係について論じた。学習内容論の全体に関する検討をそこで行ったが、本稿では、その際課題として残した陶冶の素材の内容の問題についてさらに考察しておきたい。

一 素行の教育論の構成と内容論

素行の学習論は、拙論でも指摘したように、⁴⁾ 社会化を中心とする「日用」を通じた学習の意義を強調する。その点で素行は学習内容を、それがたとえ素行が根本の書と評価する『大学』であれ『論

語』であれ、そうした書籍の読書の素材自体に基づく課程として措定する考え方を意識的に批判した。素行が、学習は読書ではなく、「日用」から乖離する学習は有り得ないとして、「出入起居事物応接の急務」を優先的に学習内容とすること、その際の方法論が、素行の内容論の趣旨としても特徴的な点であった。⁵⁾ 内容論はその点で方法論と密接不可分の関係にあり、方法論と独立的に教育内容の素材を総覧的に特定しても、そのこと自体が素行の教育論の主旨に反することになる。従って、拙論でもその関係に焦点を当てて考察をしてきたが、一方教育内容の素材自体の検討も求められる。即ち、素行の学習・教育の方法論は尚且つ主知主義的であって、それは基本的な方法なのである。批判の観点が特徴として強調されがちだが、依然素行の学習・教育論には、読書も含められた素材が記述されているのであり、それなしに学習は成立しない。⁶⁾ 陶冶材として取り上げられるものの中には批判が加えられながらも基本的な素材として評価されているものも含まれる。素材自体が完全に否定されているもの、部分的に批判されているもの、現実的に代替として認めているもの、述べていながら余り詳説されないもの等に分かれる。最後の点は、その素材に対して、必要性は認めながらも関心が薄いということになる。

素行の教育論の中、発達段階に関わって述べられた相当の教育内容論は、大藩での後継者教育から一般武士に至る家での子弟教育までを念頭に書かれたものといえる。『武教小学』『山鹿語類』『適居童問』に記述があり、⁷⁾ そこにおいて、個人差・発達段階・性別に

即し教育内容を考量している。発達段階に応じ、個人差を想定して、固定的な標準を定めることを趣旨としない点も課程観の特徴の一つであった。⁸⁾ 前述の社会化を軸にした「日用」という内容は並行して学びの対象とされていることを前提とした上で、素材の観点から見直せば、以下の記述が注意される。

『山鹿語類』では、発達段階を考量した中で、六歳までの段階にあつては、食事・歩行等の仕方から始まり、発達に応じた「日用」が内容となるが、六歳で「詩歌」の暗唱暗記を男女共に求めている。しかも「其の好まんずる処に任せて」とされる。男子に「読書」と「家職」が教育内容の素材として措定されている。八歳では「読書筆画」が求められている。⁹⁾ 「画」とあることにも注意したい。『武家事紀』所載の地図・城図等の作成の基礎となるところでもあると考えられる。女子に対しては六歳において、重点は「家職」とされ、「詩歌」については部分的肯定といえる。¹⁰⁾ 『源氏物語』『伊勢物語』は批判され、絵・書・花・琴もその実情は批判される。一方「聖賢の経伝」『列女伝』の読書を求めている。¹¹⁾ 『適居童問』では、上記の時期を男子について七、八歳として、六芸のわざを学習し、「師にゆかしめて、つたへならふことを忘却せしめざる如くに教戒」¹²⁾ することを説いている。この時期は、武士の学習論での学習段階「小学」なる事物の学習に相当していると考えられる。

素行は、『山鹿語類』の学校論においては、武士・庶民共なる社会教化策として、「徳」と「業」を教育内容に想定した。さらに庶

民を対象として、「六徳・六行・六芸」を教育内容とした学校を中国古典の学校制度を引用する形で取り上げている。¹³「聖学」によって教化する必要性から「性理学」、「詩文・記誦」が批判されるが、「詩文記誦を廃す可きにはあらざれども、本を棄て末を追ふは聖人の学と云ふべからず。」が基本的姿勢であり、「詩文」を否定しない。¹⁴素行が理想とする「聖人の学校」の教育内容は「日用」「業」をも教え「読書」に準じた課程ではない。¹⁵この課程観は、前述の子弟への教育論そして学習論にも共通しているが、教化的な視点に立つ学校論が原点にみえる。学校論に続く「礼楽」論において、「詩」の意義を以下のように記している。

詩は志也と注して、内にあつて其の聲外にあらはるるものを詩と云ふ。詩を詠歌すると云ひて、調子をととのへて詠曲してうたふ、是れ志によつてあらはるるの聲ある也。舞動は其の志を形にあらはして舞踏すること也。此の三各々別にあらず、唯だ内の動く処を外に表するの聲形なれば、国の風俗、民の虚実、世々の政道、皆樂によつて知るなり。一人を以て云ふときは、喜怒哀樂によつて其の志聲にあらはれ其の形にうごく、是れ則ち天地自然の樂と云ひつべし。春の木の東風にひびき、秋の蟲の壁裏に鳴く、いづれか樂によらざらん。聖人は是れを斟酌して其の聲をただし、詩を實にし、舞踏する処に礼節を以てして、其の聲のひびき、詩の詞、舞踏のすがた、幽にして以て神を感じしむるに足り、明にして以て人を感じしむるに足るが如くならしむるゆゑに、是れを聴聞し是れを一見のともがら何事となく感激して人心自然に和暢する、是れ樂の徳也。¹⁶

しかし素行の学校論において日本での学校設営の現実案は、庶民を対象とした寺子屋であった。¹⁷ならば、実態として既に当期の寺子

屋で行われている「読み書き」が内容として認められていることになる。「手習い物学ぶ」そして「祭礼・射御」に意義を認めている。陶冶材として『庭訓往来』『明衡往来』『日記帳』の類が批判されている。¹⁸町方での寺子屋については「子弟一類の若輩なる輩その外町人ども」の「読書手習い」を評価している。「朝読書・昼手習い・夜作法」が内容であった。¹⁹

武家子弟への教育論と庶民学校論と、重なる面もありながら、対象を異にした内容を考量していることに関わって、素行の教育内容論の対象の区別がどのように意識されているかを確認したい。

素行が論を説く上で主に対象としたのは、積徳堂の門人、素行に直接兵学を習った門人たちである。元禄九年（一六九六年）即ち素行没後十三年後の時の積徳堂入門規定である『流儀成之作法並誓紙前書』の「流儀門弟成之覚」には「一、当流之儀は、国主城主其外頭立候衆中御勤候事にて候、平土組付之類相勤之儀にて無之候、然共至て志之衆中には、任其意候儀も可有之候、惣て武家之外伝来仕間敷候、武家にても至て軽きには可為無用、医者出家町人百姓其外遊民之類堅禁之候事」²⁰とある。既に考察した武士の学習内容論は、彼らを対象としている。

しかし、『山鹿語類』の構成に照らして確かめてみると、「五倫篇」の「君徳」では、君主とその後継者を意識した学習論とその内容が、同「民政・治教」では、君主の教化政策としての前述の庶民学校論が、そして同「父道」で前述の武家子弟への教育論とその内容が説かれている。「君主」の教育内容があれば、「臣」の教育内

容があると考えられるが、「臣道」には学習の問題はほとんど触れられない。

「臣道」には、「今日仕官の輩すべて可学の大略は、其の本を正大にし、其の行を端実にし、其の材を明敏にし、其の器を寛廣にす、是れ自ら守つて相つとむべきの処也。……故に動容周旋手足の容に至るまで、礼儀勇を以てなす。是れ出でて仕君の法也。其の内に入りて居するの間、父兄子弟の親、賓客家人の交際、練身游藝の勤め怠る処なく、餘力を文を講じ書を明にして、古の聖意を味はひ、本朝の国俗武家の式法を尋ね、広く問ひ審に聞きて是れを斟酌校了せんこと、是れ臣子の所要也。所志実地に至るときは、其の学亦実にして虚ならず。」⁽²¹⁾とある。これより確かめられるのは、君主から臣下の末端に至るまで、学習内容はほぼ同一であるが、その範囲と水準は、武士個々人の職分や学習意志により、幅があると認められる。実態は「日用」「家職」によりながら、主に「博文」のレベルに差があると考えられる。

「子道」に学習論がないのも、素行の武家の家庭教育論と学習論との関係をよく示していると思われる。学習は、「聖学篇」の「致知・為学・師教・読書」で詳述されるが、「父道」において、親の役割としての「教育」的視点から特に意識的に詳述して論じられることに特徴があるのである。各々の学習という観点に対して、親の役割としての教育という視点から述べられているのである。⁽²²⁾素行は常に関心を教育におき、君主後継者の教育、一般武士後継者の教育について、男女共に論じ、発達段階を考量した論を『修教要録』

『武教小学』から『山鹿語類』そして『謫居童問』へと発展させた。基本的には、素行には「臣」から庶民に至るまで、家での教育が重要になるとみていることが、次の記述からも窺える。

大臣の子弟、官に挙げらるるは官についての教戒あり、家に居ては家に在るの教戒あり。上古は皆学校において是れを教ふといへども、異朝の学校も名斗りにて、唯だ文学詩賦の沙汰のみなれば、是れを教戒とは云ひがたし。……然れば大臣の子弟家に居て閑暇多きの類、皆其の父兄家法を立てて、其の子弟の人となり立つ如く致す可き也。……士農工商各々それぞれに随つて家法作法の教戒詳なるときは、人何ぞ惡に陥らんや。⁽²³⁾

「士道立本」篇が該当するように、上層武士の教育内容、一般武士の教育内容とも学習論の全体としては同様であるが、その求められる水準は異なる。学問への関心が薄い武士に対しては、例えば、武田信玄の言を引用して「学と云ふは読物斗りに非ず、……一日に一色能き事を聞くととも、十日には十色聞習ひ、……一文不通の人なりとも智者と云はれつべし。」⁽²⁴⁾というような学習がむしろ有用だとするのである。このように水準別の学習を想定していたと考えることが出来る。また一方で、「奴婢御僕之用」も論じているが、そこでは専ら「奴婢御僕」としての「日用」が問われているのみである。故事の引用の中に「且つ学校に入れて物まなびせしむ」奴婢の例があるが、その効用を問題にしていない観がある。⁽²⁵⁾素行は、階級、学習段階、必要性、水準、性別に即した内容を考えていたが、上層武士に重点があつたのは前述の通りである。各人の学問への意志・専門的に学ぶか否かの別、資質の差、そして発達段階までを考量する

が、素行の門人を対象として、君主・君主を補佐する者を中心の説かれた、上層武士としての政治教養が対象である。しかし一般武士の日常倫理・生活規範をも含んでいるのである。

君主の学習内容は、君主の経世に益する「聖学」であるとされ、経世に益する観点での取捨選択と応用発展的な関連内容全てが含まれてくることになる。⁽²⁶⁾ 素材の問題としては、『書経』『史記』より堯舜の政治・事跡を学び、『帝範』等が使われる。⁽²⁷⁾ しかし、それも『尚書』『貞観政要』『群書治要』含めて「政道の要をしるせる書多しといへども、……文才のみ也。」⁽²⁸⁾とされ、経世に活用されていないと批判される。⁽²⁹⁾ 『類集三代格』に至っては「政道の要とは云ひ難し」と一蹴される。⁽²⁹⁾ 「聖学」は「六経」ばかりでないとの批判は、基本的な典籍としてやはり『詩経』『書経』『易経』『春秋』『礼記』を評価していることを窺わせる。⁽³⁰⁾ 「幼主平日の学」は「人先ず文字を知り、而して後に古今の事を談ぜんと思ふべし。故に読書して聖賢の意味に通ず、これを疏にすべからず。」とし、「自ら経書の本文を読み、その字義を知り、而して意味を究むべきなり。」として、「古今の勢・地勢人情」を知るために、『春秋』等よりも日本各地の藩主の家譜と地理、軍功、家臣の譜・言行についての知識を内容として「実学」と評価するのである。⁽³¹⁾

二 教育内容の基礎的項目の検討

学習内容論の考察において、素行に陶冶材として重視されている

内容は、①文字・言語の基礎、②中国古典による「聖人」の思想・言行録・「礼楽」の歴史と内容、③武家の歴史・地理・言行録、④「日用」、⑤その他（天文・暦数・自然地理・技芸・武芸）に分類出来ると指摘した。⁽³²⁾ その内、①⑤の素材に関して幾つか考察をした。 「事物の学習」として「六芸」相当の学習があり、それは前述のように発達段階を考量した素材としても意味を持っていた。教育内容の基礎的な部分であり、基礎教材と言い換えることも出来ると思われる。

まず①に関して、素行は「初学の輩は……詳に文字訓詁象数名物凡例を記得す」⁽³³⁾として、字句の解釈や書中の大要や数や地理の基礎的な知識を暗唱という形で学習することを促している。素行には、この意味での暗唱に便利な教材がみられる。「天和二年六一歳七月二六日合戦年月短歌を述ぶ」⁽³⁴⁾としている。『古戦短歌』は門人作であるという説もあるが、⁽³⁵⁾ 古来の戦の年月を歌に詠み込んで覚え易くしたものと考えられる。同様の意義を持つものに『武具短歌』がみられる。津軽耕道にも『甲冑短歌』のように、この工夫は伝承された模様である。⁽³⁶⁾ いずれにせよ、素行門人の間に定着、普及していることが認められる。

大永元年辛巳、

一條河原の合戦は、

甲州武田信虎と、

十二月二十三日也。

福しま爰にて討死す、

福嶋上総と戦ひて、

同四年甲申、

是れより福嶋合戦と云ふ。
北條氏綱江戸に入り、
河越の城へ退去せり。

修理大夫朝興は、
豊嶋郡江戸の城、

太田道灌繩張にて、

康正二年子の年より、

長祿元年丁丑、

四月八日に成就せり、

道灌其の時廿五とぞ。

天文六年七月に、

氏綱川越を乗取れり、

上杉朝正十三にて、

松山の城へ遁れ入る、

難波多是を守護すとぞ。³⁷⁾

以下、同様の書き方で、合戦名とその年月日、人名とその年齢また地名等を詠み込んでゆく。途中「七年七月十五夜と、云伝ふるはあやまり也。」等、年月の誤りを訂正することまでを詠み込んでいる。以下「小豆坂合戦」「河越夜戦」「戸石合戦」「桶狭間合戦」

「石ヶ瀬合戦」「国府台合戦」等、全部で八二の事歴に触れている。三河一向一揆や奈良大仏焼打ち等の事歴も含んでいる。³⁸⁾ 結びは「同八年四十八、神君將軍に補し玉ふ。同十年台徳公、征夷將軍に任ぜらる。慶長十一三月に、江戸の御城御普請有り。同十二正月に、駿河御城御普請とぞ。同十六三月に、秀頼二條へ来朝せり。同十九甲とら、大坂初度の御発向、元和元年乙卯、五月七日に落城して、秀頼誅伏翌八日。是れより天下いやましに、千秋萬歳萬々ざい、目出度かりし御代ぞかし。」³⁹⁾と徳川政権の賛美となっている。合戦年月を丹念に記しており、人名・地名と事歴を年月順に暗唱することを目的とするものといえよう。

同様に『武具短歌』では、名称を単純に記憶させようとする意図が明白である。「それ武具は、鎧・はら巻・太刀・かたな。冑は筋や星かぶと。頭なり・とつはい・四方白。はりかけ冑・二方白。惣ふくりんにかたしろや。さて名所はかずおほし。しころ・ほろ付・

吹返し。四天・しなだれ・八まん座。真向・まびさし・うちかぶと。見上うけ張・しのびのを。まへ立物にうしろ立。頭立・脇たて・ひき廻し。面頬・猿頬・うば肪や。甲州肪によだれかけ。のどわ・脇ずり・わきあてや。」以下、武具名をあげ、兵法の用語を最後に「その外籠城・城攻や。陣取・そなへ・ぎやうれつに、伏兵・かまり・小ぜり合。夜込・夜いくさ・ふないくさ。物見・忍に相ことば。てがらの批判・武者言葉。勝鬨・軍礼しなじなや。いづれも深きならひあり。」と挙げ結んでいる。⁴⁰⁾

武具名について、「それ武具は、鎧・はら巻・太刀・かたな。」を導入とし、初めに冑から胴巻にかけて武具それぞれの種類名称を挙げてゆくが、引用の部分についてみると、筋冑・星冑・頭形・兜盔・四方白・張懸冑・二方白・惣覆輪・片白・綴・母衣付・吹返・四天・品垂・八幡座・真向・眉廂・内冑・見上浮張・忍緒・前立物・後立・頭立・脇立・引廻・面頬・猿頬・姥頬・甲州頬・涎掛・喉輪・脇摺・脇当を挙げている。仮名混じり文で平易さを意識し、調子をみれば、「五、三・四・五、七・五、三・四・五、七・五、七・五、三・四・五、三・四・五、三・四・五、三・四・五、七・五」と続いている。「三・四・五」と「七・五」を基本としながら、途中で「さて名所（などころ）はかずおほし」「色々の、をどし毛色はあるぞかし。」「扱さしものは、いろいろや。」等調子をとっている。詠み込まれている武具・兵法名の数、戦場・陣中の装束・道具を中心に、冑、胴巻、小手、扇、刀、鎧、弓、鉄砲、馬具、楯、幕、旗など、それに付随する小道具・衣装類を挙げ、全

部で三五六にわたっている。とどこどころで、「胴は桶がは、ほとけ胴。」「小手はうぶ小手・じばん小手。」「やりは持鍵・長柄やり。」のように種類を示しながら、「左のかたは射むけなり。右は勝手にうしろをば、おし付・あげ巻・ゑりまはり。左右のそでにぐみのくだ。」のように、衣装の位置や用途等が覚えられるように言葉を添えている。基本的には、名称自体の暗記が目的とみられる。

さて、内容の基礎的項目の検討に関して、次に⑤の問題であるが、素行は基礎学習として「天文を考へ、地理を知り、六芸をならひ、文武の事物を学んで、身体骨節をならはし、古今の業を知ること」と述べている。ここで、素行の述べる「天文・地理」の内容とは如何なるものなのか、少しく詳細をみたい。

素行の『山鹿語類』聖学篇後半に取り上げられる概念は「陰陽」「五行」「天地」「性心」「大原」という朱子学の思惟様式に従えば、根源的な理念に相当する項目であるが、「天地」は自然現象に関する問答を多く含む。『朱子語類』『二程語録』『邵子全書』の引用が多いが、それに素行の解釈が述べられている。素行の自然現象に対する日常的な観察を踏まえた解釈を含んで記述されるが、概ねそれは文献考証の範疇といえる。⁽⁴²⁾

素行にあって「天地」は、「何ぞ、形なからんや、本と形なし、故に能く千状萬体を生ず。既に日月星宿山河人物の見るべきあり、何ぞ形なしと曰はんや。……天地は只だ自然の一理なり。」⁽⁴³⁾というように、可視的なもの、実態としての現象・事物に関心の中心がある。「天地何ぞ開闢の説あらん。既に開闢なし、故に未判の論な

し。天地は本と天地、萬古以前又天地、萬世以後又天地、更に消長増減なきなり。」⁽⁴⁴⁾とあり、「邵子の天地始終の説皆術数の論にして、聖人の言はざる所なり。人物の見在の処に就いて此の説を立つ。天地何ぞ始終あらんや。」⁽⁴⁵⁾というのが、素行の見解であった。「天地に古今なし。人に古今あり。故に上古近代の異あり。天地は陰陽の総管なり、人は萬物の一なり。人物本と天地と同じく生成して、其の初知ることなし。……人の聰明漸次に長じ来る、故に後來数般の模様あり。」⁽⁴⁶⁾との世界観に立って、「曆数も亦聖人民を教へ時を授くるの道なり。数は始終を立てざれば計會せず。其の計會すべきの法を考へ、数を立て除乗して以て究め尽すなり。是れ皆日月星宿運轉周旋の迹にして、其の象形以て稽ふべし。故に這の曆数何ぞ之を知らんや。」⁽⁴⁷⁾と捉えている。また、人間と天地との関係論にあって、人間は「視聽言動思」があるゆえ、「天地」に優っているのかとの問いにも、「人は生物なり、耳目口鼻なきときは、其の生を遂げず。故に視聽言動思あるも亦自然の用なり。」⁽⁴⁸⁾と、形而上的な性理学に伴う一連の質疑に対して、素行は専ら唯物的な解釈で回答している。一方、素行にあっては例えば、「天文を以て效を我れに切にす。」⁽⁴⁹⁾或いは、天候に関して「龍」説を否定しない、「人の極悪、天の厲氣以て相通じて、人を殺し廟を震することあるなり。」⁽⁵⁰⁾としており偶然との説を退けている等、道学的解釈の側面を残している。

「天文」に関する知識として、太陽についてその運行・黄道・日蝕、月について月齢・月蝕、星について二八宿と従星、木星火星金星水星土星に関して記している。地球については、『三才図会』等

を引きながら、球体説・大気の様子・昼夜明暗・寒暖・南極北極赤道・度数について述べる。⁽⁵⁶⁾ また気候について「時候及び地形に因るなり。」⁽⁵⁷⁾ としながら、風・雲・雨・露・霜・雪・霰・霽・雹・氷・霧・霞・虹・暈(かさ)・雷について記す。⁽⁵⁸⁾ 太陽・月の距離の問題、隕石、銅儀管による度数測量、天体の動き、彗星・流星、また冬至夏至春分秋分、歳差、渾天儀による天体の観測等について「天度・曆数」の関心として述べ、暴風、雲の高低や伴う現象、天候の予測等について問答を交わしている。⁽⁵⁹⁾ 兵学者として自身が関心を持つ部分と、一方、「具に星学者流に索ぬべし。」⁽⁶⁰⁾ と専門家に委譲するところもみられるが、「曆書に聖人の言なし」⁽⁶¹⁾ としながらも、問答は多岐にわたり、その知識は詳細である。

「地理」について、ここでは自然地理に相当する知識だが、記述の分量は多くはない。土質・岩石・鉱物・山・海・潮汐・川・泉・地震について記し、木材、気候による植生、土壌と作物について、火山の噴火、水質等の記事がみられる。⁽⁶²⁾

素行の学問にあつて、天文と自然地理領域は関心の中心に位置するとはみられない領域であり、それがあえて基礎学習の素材として取り上げられているという問題を考えてみなければならない。果たして、前記の知識の中、どの水準までを求めているのか判然としないう面もある。そもそも「雜家者流」の「此れの外農家者流・陰陽・天文・五行・刑法の書、唯だ博識に存り」⁽⁶³⁾ とあるように、素行にとっては傍系的領域なのである。素行が例えば『謫居童問』で、楊朱・墨子・老莊・韓非子、仏教・禪宗・回教、荀子・董子・賈誼・

韓退之・周茂叔・陸象山・朱子・陽明、仙家・道流、忌部・卜部神道を網羅的に挙げて批判するとき、それは学問としての倫理規範の側面からの評価であり、あまり引用されないものも含むとはいえ、素行にとって中心的な領域において抵触する批判対象であった。⁽⁶⁴⁾ それに比較して、天文と自然地理は、関心自体が希薄にみえる。それでも、『山鹿語類』にかなり詳細な記述もみられるのは、兵学者としての知識の蒐集と体系化という素行の意向に照らして欠くべからざる領域であり、また素行が自身の思想において世界観を構成する際に、「天地」に関わる問答は解決しなければならない問題であったことが、大きな理由であると考えられる。その点からすれば、学習・教育の内容の問題として事物の知識とその理解を考えた時に、事物の実態と現象の理解について素行自らが逐一解釈を提示することなしには、学習・教育内容として意味をなさないものと素行自身も感じていたと考えられる。前者による知識を土台に、後者の観点から事物の学習としての必要性を主張したものと考えられる。一方、人文的な地理は別途、兵学的関心に関わりながら、諸国図・城図等を含み、地形・風俗・産物・交通路にわたった体系的知識をまとめている。また一般武士の学習としては、『武教小学』に述べられるような「鷹狩」の意味の一端としての「險阨遠近山川之形を知り、風俗街歌巷説之品を計る」というような、体験的に地形を知り、「時代の政務を略ぼ発見する」⁽⁶⁵⁾ というような水準もありうるのである。

最後に、素行が蒐集した知識の体系の中で、教育的関心に関係し

た書籍を素行の私塾積徳堂の書籍目録から拾ってみる。⁽⁶⁶⁾ の中には前述した批判対象になった書物も含まれると同時に、『武具短歌』等の作成に関わると推測される書物も含まれる。むしろ、こうした書籍の素材の吟味の中で、素行の教育論が形成されていった経緯が窺えるのである。

軍記として、『八幡縁記・童蒙訓』『国名風土記』『短歌年代記』『天慶記並前九年後三年記』、林羅山著の『本朝人品伝』、往来物や古典文学的素材には、『明衡往来』『庭訓抄』『万葉抄』『年中行事歌合』『大和物語抄』『栄花物語系図』『武家百人一首』『鴨長明海道記』『伊勢物語』『土佐日記』『授童抄』『仮名遣』『惺窩倭歌』『源氏書本』、『天文・暦数』については、『天文図共』『三才図会抜粹』『算書町間』『九数指掌』、地理的素材は、『諸国道筋』『知行高覧書』、また合戦図『関原大図』『大坂合戦図』、城図『館林城図』『水戸城図』、『御陳取之図』『五十騎一陳座備之図』『人形備立図』、『世界之図』『日本惣中図』『日本国々大図』『肥前長崎之図』『江戸大絵図』『舟路之図』等がみられる。⁽⁶⁷⁾ 図に関わっては、『易六十四卦』『面形図』『犬追物図』『大内裏之図』『勸進能棧敷図』があり、自著『画家秘訣』がある。⁽⁶⁸⁾ また、有職故実関係では、『禁秘抄』『小笠原流躰方』『小笠原流射礼』『図繪寶鑑』『職原抄』『居家必用』『輔養論』『養生書』、他、『葦田氏馬書』『書礼抄』『妙薬抄』『外科金瘡書』『医法明鑑』等、素行の広範な知識蒐集の意図がみえて興味深い。

(結)

本稿においては、素行の教育内容論に関わって、まず教育論の構成を確認して、対象別の、即ち階級・学習段階・水準・性別等にわたる教育内容の把握に努めた。同時に、批判も含めて、素材としての書籍がどう評価されているかに注意して、その概要をみた。

そして、素行の教育内容論の中で、基礎的教育として重視された素材の中で、暗唱の素材、また「事物」の教育・学習の素材としてある「天文・地理」について、若干の考察をした。素行の論の中では傍系的領域だが、教育・学習の基礎的な内容としては、いずれも評価されている面である。素行が広範な知識の体系化を意識していたこととの関係で、教育・学習の問題として実際にどこまでの水準の内容を求めたのか、やや不明な幾つかの領域がある。後者は、それに該当する。この問題を明らかにするためには、素行の「象数」の理解・解釈についての考察が求められると思われる。

素行の教育論における教育内容の全体を把握する作業としては、尚、総覧的に素材の各々を抽出した上で、その領域の分類と学習段階を考察し、各々の素材の意味を探る必要性を感じている。それを課題としたい。

【註】

- (1) 拙稿「山鹿素行の「聖学」における学習内容論の考察—陶冶の素材を中心に—」(工学院大学共通課程研究論叢三九—二・平成一四年二月) 参照。
- (2) 拙稿「山鹿素行の教育論の思想構成上の特質に関する考察—学習論・家庭教育論・学校論の位置を中心に—」(工学院大学共通課程研究論叢三六—二・平成十年十二月) 参照。
- (3) 拙稿「山鹿素行の学習観 —「聖学」の方法論を中心に—」(工学院大学共通課程研究論叢三三・平成七年十二月) 参照。
- (4) 「山鹿素行の「聖学」における学習内容論の考察—陶冶の素材を中心に—」(前掲) 参照。
- (5) 謫居童問・広瀬豊編『山鹿素行全集(思想篇)』昭和一五—一七年・岩波書店・第一二巻・二四—五等参照。
- (6) 山鹿語類・『山鹿素行全集』(前掲) 四・二七頁参照。拙稿「山鹿素行の学習観 —「聖学」の方法論を中心に—」(前掲) 参照。その点で素行が主張してきたのが、自身の「四教一致」期の教育観の批判でもあり、「心術」の捉え方でもあった。「日用の事物」の学習には、「材」が必須なのである。「道原より知を出して知を以て材を分かつなり。材を集めて知にて分け、知に分けて道原に帰すべきなり。」と記している(援話・寅卯辰・『山鹿素行全集』(前掲) 十一・四一—八頁)。また「書籍を述作するに、知らざることを工夫して致すは皆誤なり。廣見廣聞して、その内より善きことを撰みて用ふるところをよしとす。」(同前・十一・四一九頁) 等とある。
- (7) 拙稿「山鹿素行の教育論の思想構成上の特質に関する考察—学習論・家庭教育論・学校論の位置を中心に—」(前掲) 参照。
- (8) 山鹿語類・『山鹿素行全集』(前掲) 六・二八九—二九〇頁。同前・二八—一頁。謫居童問・(前掲) 一二・二六頁。拙稿「山鹿素行の児童教育論—児童理解と教育方法を中心として—」(早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊第一集・昭和六十年一月) 参照。
- (9) 山鹿語類・同前(前掲) 六・二八九—二九一頁。
- (10) 同前六・二九一頁。
- (11) 同前六・三〇一—三〇二頁。
- (12) 謫居童問・(前掲) 一二・二七—八頁。
- (13) 山鹿語類・(前掲) 五・三一—四二頁。
- (14) 同前・四四頁。
- (15) 同前・九・一五八頁。経学中心の「読書」に即した課程は経学の普及により成立したとも述べている(同前)。
- (16) 同前・五・五二—五三頁。
- (17) 同前・五・四五—四七頁。
- (18) 同前・四六頁。
- (19) 同前・四・四一—四二頁。
- (20) 流儀成之作法並誓紙前書・『山鹿素行全集』(前掲) 補遺・四頁。
- (21) 山鹿語類・(前掲) 六・三二—三三頁。
- (22) 親には母親も含まれている(同前・六・三〇—二頁)。
- (23) 山鹿語類・(前掲) 四・二四七—八頁。
- (24) 同前・八・四三八頁。
- (25) 同前・六・二五七頁。「僕を御するの警戒」(同前・七・一六五頁) もある。
- (26) 同前・九・三三頁。
- (27) 同前・四・二九頁。
- (28) 同前・四・三二頁。
- (29) 同前・四・三三頁。
- (30) 同前。「六経」を「聖作」とみている(同前・九・一六二頁)。君主の教化に資するという観点での素材としては、「農民工婦の…辛苦を、詩にも作り歌にもよみ」(同前・四・六八頁) という資料も評価される。
- (31) 随録・『山鹿素行全集』(前掲) 一一・五五六頁。
- (32) 拙稿「山鹿素行の「聖学」における学習内容論の考察—陶冶の素材を中心に—」(前掲) 参照。
- (33) 山鹿語類・(前掲) 九・一六三頁。
- (34) 年譜・『山鹿素行全集』(前掲) 一五・三八六頁。天和二年(一六八二年)。
- (35) 古戦短歌・『山鹿素行全集』(前掲) 補遺・一五頁。拙稿「山鹿素行の児童教育論—児童理解と教育方法を中心として—」(前掲) 参照。
- (36) 同前・一一頁。拙稿「山鹿素行の教育論の受容に関する考察(その二)—津軽耕道における教育方法論を中心に—」(工学院大学共通課程研究論叢四二—二・平成一七年二月) 参照。
- (37) 古戦短歌・(前掲) 補遺・一六—二六頁。
- (38) 同前・一七—二五頁。

- (39) 同前・二六頁。
 (40) 武具短歌・『山鹿素行全集』(前掲) 補遺・一一〜一四頁。
 (41) 謫居童問・(前掲) 十二・三三頁。
 (42) 山鹿語類・(前掲) 十・五五〜八六頁。
 (43) 同前・七一〜二頁。
 (44) 同前・七四頁。
 (45) 同前・七五頁。
 (46) 同前・七六頁。
 (47) 同前・七八〜九頁。
 (48) 同前・八〇〜一頁。
 (49) 同前・九六頁。
 (50) 同前・一三六頁。
 (51) 同前・一三八〜九頁。
 (52) 同前・九〇〜二頁。日蝕に関して「其の交を加へ去る処、曆家推算して以て之れを定む、定数あり。」等と記される(同前・九一頁)。
 (53) 同前・九二〜六頁。
 (54) 同前・九六〜一〇一頁。「星辰」とあるが、「辰」とは「星」の間の空間を指すとする(同前・九六頁)。
 (55) 同前・八六頁。
 (56) 同前・八三〜八七頁。
 (57) 同前・一〇三頁。
 (58) 同前・一〇二〜一一三頁。大氣の意味での「氣」の項もある(同前・一〇九頁)。
 (59) 同前・一一四〜一七四頁。
 (60) 同前・一三一頁。
 (61) 同前・一四七頁。
 (62) 同前・一七四〜一八六頁。
 (63) 山鹿語類・(前掲)・九・二九〇頁。
 (64) 謫居童問・(前掲) 十二・三十頁。
 (65) 武教小学・『山鹿素行全集』(前掲) 一・五〇九頁。
 (66) 積徳堂書籍目録・『山鹿素行全集』(前掲) 一五・八六一〜九〇二頁。地図等の図類については、約四百枚以上の図類があり、諸国図が約四十枚(航海図や世界図も含む)、城図約百枚、合戦図百枚という規模である(山鹿光世『山鹿素行』平成十一年・三三八頁。因みに、江戸浅草田原町の積徳堂は、延宝六年(一六七八年)以降素行没後も約六十

(68) 年続いた私塾で、多数の門弟の出入りがあり、講堂(学問所)と書齋(書院)を有し、門人も寄宿していた(『山鹿素行』同前・一三九〜四〇頁)。
 「原圖書」・山鹿語類・(前掲)・九・一七七頁参照。

(うちやま むねあき 本学助教授)